

キャンパスを歩き、街を訪ねる。

弥生キャンパス旧4号館跡地に昨年竣工したフードサイエンス棟を訪ね、農学部教授にファンが多いという「定食清水」を覗く。

「食の安全」で人材育成

フードサイエンス棟

昨年11月、旧4号館跡地にフードサイエンス棟が完成した。「食の安全」をメインテーマとするこの研究棟は構想から足掛け6年、官民念願の研究施設だ。

8階建ての建物には食の安全研究センターをはじめ、産学連携協同研究ラボ、記念ホール（約100名収容）、講義室、会議室、セミナー室などの機能スペースが設けられ、さらに喫茶コーナーや展示スペース（董雄記念室）がある。キューピーやアラハタの関係会社として知られる中島董商店は、食の科学の発展を願う創業者中島董一郎氏の遺志を継ぎ、研究棟の建設に浄財を投じた。

3、4階に設けられた産学連携協同ラボには現在、ネスレリサーチ東京、Give&Give株式会社山忠、メロディアン株式会社、OSGコーポレーション、プライムテック株式会社、住友電気工業株式会社といった企業が入居し、活動準備が急ピッチで進められている。最上階には研究検証のための最新鋭の設備を備えた動物実験棟があり、食の安全に関わる様々な研究に利用される。

食の安全研究センターのセンター長、関崎勉教授は、家畜衛生を専門にやってきた。筑波にある家畜衛生試験場の研究員から研究室長まで歴任したのち、独立行政法人動物衛生研究所の研究チーム長として細菌・寄生虫病研究を統括した。2008年7月、食の安全研究センターに着任、2010年4月、現職に就いた。



食の安全研究センター長に着任した関崎勉教授

今後の抱負について尋ねると「大学なので人材育成にも力を入れたい」という答えが返ってきた。「食の安全をきちんと考えるには、いろいろな学問領域を広く学び、自分の問題意識でそれらを総合して行動できる人材を育てなければなりません」。

そのための教員も整っている。数は全国最多。専任3名のほか、兼任というかたちで学内外の教員が総勢29名控えており、ゲノム解析から農業経済、リスクコミュニケーションなど多様な領域を広くカバーする。「食の安全」を追求するうえで、企業の研究活動にも、次世代の人材育成にも、絶好の場といえるだろう。

